

無形文化遺産をめぐる認識

——エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ

かわせ いっし
川瀬 慈

民博文化資源研究センター



二〇〇三年にユネスコ総会で採択された無形文化遺産保護条約は、西欧重視の遺産概念をうち破るラディカルな条約だとされる。しかし、選定にまつわる問題も多い。

エチオピアの無形文化

筆者は二〇〇一年以来、エチオピア北部の都市ゴンダールに



都市ゴンダール、ファシル城をはじめとする世界遺産に登録された遺跡群がみえる

おける音楽・芸能を対象にした人類学研究を、映像的手法を用いておこなってきた。エチオ

ピアでは二〇〇五年から二〇〇八年にかけて、ノルウェー政府の援助のもとユネスコ・アジスアベバ事務局主導による「エチオピア伝統音楽・舞踊・楽器」調査・記録プロジェクトが実施された。本プロジェクトをきっかけに、各国の研究者や国際機関のスタッフ間で、エチオピアの「無形文化」をテ

マにした活発な研究交流が促進されることになった。筆者自身

も、映像人類学的な立場から首都のアジスアベバにおける民族舞踊の映像記録をおこなうと同時に、現地の研究者による映像記録の補助や指導をおこなった。筆者は、本プロジェクトに実際にかかわることで、何を無形文化とみなすかの認識、さらには保護すべき無形文化遺産に対する見解については、研究者間のみならず、無形文化にかかわる当事者の社会においても大きく異なり、なかなか一筋縄にいか

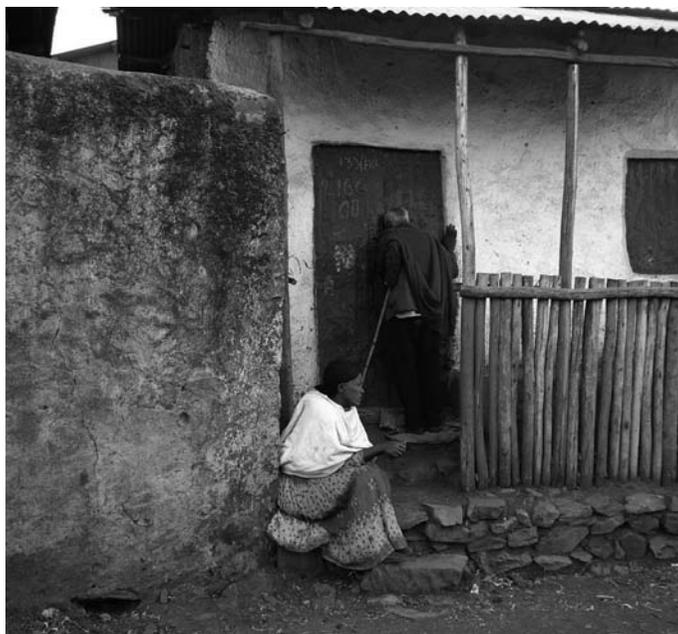
ないことを学んだ。

音楽職能集団、ラリベロッチ

この期間とくに、無形文化の調査と保護における映像記録の活用に関する機運が高まり、筆者が制作に携わったエチオピアの音楽や舞踊に関する映像記録が、エチオピア国内の無形文化保護にかかわる会議やアジスアベバ大学エチオピア研究所、JICAエチオピア事務局等で幾度となく紹介された。そんな折に、エチオピア観光文化省とユネスコが共催した会議「ジブ

チ・エチオピア・ソマリア無形文化遺産会議」において、ユネスコ・アジスアベバ事務局のスタッフのはからいで、ラリベロッチとよばれる音楽職能集団の活動を対象にした筆者による映像記録が上映されたことがある。

ラリベロッチは、単独であるいは夫婦で、早朝に家の軒先において斉唱をおこない、人びとに祝福のごとばを与え、それに対し、金銭、衣服、食物等を受け取る。一部の地域では、法要（人の死から四〇日後、一、七年ごとにおこなわれる）の際に故人の名誉をたたえる目的の斉唱をおこない、その報酬に牛の大腿部を受け取るのが慣わしである。ラリベロッチは、音楽活動をやめるとハンセン病（ラリベロッチの隠語で、シユカッチ）とよばれる（）に侵されるという信仰をもち、ハンセン病への恐れから、先祖代々音楽活動を継承してきた集団である、と人びとに信じられてきた。ラ



家の玄関で斉唱をおこなうラリベロッチ

リベロッチは近所の住人たちに家々の主の名前、宗教、職業、家族構成等の情報をあらかじめ取材し、歌詞の内容へと反映させていく。筆者は、筆者自身が強く惹きつけられた、ラリベロッチのこうしたたたかきや、まるでコミカルな演劇のような住人たちとの豊かなやりとり

フォーカスして映像記録を蓄積してきた。

恥ずべき文化か、遺されるべき文化か

さて「ジブチ・エチオピア・ソマリア無形文化遺産会議」での上映では、会場のエチオピア文化遺産調査保護局の役人たち

から、こちらが予期しなかった反応を得た。それは、乞食のような放浪の職能集団をこらえた筆者作品は、エチオピアの貧困イメージを強調させる、という批判であった。無形文化をめぐる国際的な議論の席では、とりわけ無形文化の「見ばえ」を整えることに関心が集中する。

ラリベロッチをはじめ、音楽を専業とする職能集団は、ポピュラーミュージックの世界で活躍するスターが出てきた現在でも、モヤテン（ニヤ）の手に職をもつもの（の意）という範疇のもと、機織、鍛冶屋、壺作り、皮なめしなどの職人とともに、卑しい職能をもつ人びととして蔑視される傾向にある。しかし筆者は、上記の役人のような主張をそのまま鵜呑みにせず、無形文化をめぐるそうした認識の違いの政治・文化的背景、時代的な変遷を注意深く探る姿勢が研究者には求められていると考える。